



パセリ・エイジ

森谷今日子



講談社

もりや きょうこ
森谷今日子

1959年7月10日、美唄市に生まれる。北海道武蔵女子短期大学卒業。

同人誌「蟹」に参加し、創作をはじめ。「北方文芸」等に作品を発表し、北海道新鋭集に「たたずむ路地」が収録される。著書に『フレンズ』（青弓社刊）がある。

パセリ・エイジ

1991年11月15日 第1刷発行

著者 森谷今日子

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二―二／郵便番号一―二―〇
電話 文芸図書第一出版部（〇三）五三九五―三五〇四

書籍第一販売部（〇三）五三九五―三六二二
書籍製作部（〇三）五三九五―三六一五

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

定価 一〇〇〇円（本体九七一円）

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えいたします。

なお、この本についてのお問い合わせは文芸図書第一出版部宛に願います。

© Kyoko Moriya 1991. Printed in Japan

ISBN4-06-205563-5

（文1）

目次

パセリ・エイジ

5

アーリー・サマー

77

あとがき

162

パ
セ
リ
・
エ
イ
ジ

装幀
赤木
仁

パ
セ
リ
・
エ
イ
ジ

ポブラの葉がまた光った。

あくびを押さえて私は頬杖をつく。外に目を向ける。風に揺れる葉の中から明るい光の粒が無数に生まれてくるようだ。

すり鉢状になっている333教室は、出席簿に名前を書くただに集まった学生でいっぱいだ。その一番前にたった一人の男、佐山講師が心持ちうつむいたまま講義を続けている。学生達は猫の子のように背中を丸め、終わりのベルを待っている。

宗方かなえは私の二列前で、同じように外を見ていた。私の席から顔は見えないが、はれぼったい目をして頬杖をついている顔を想像することは簡単だった。艶のある長い髪にタンポポの綿毛がとまる。面倒そうにそれを払う指が白い。ゆったりとした黒いシャツは

小柄な体をいっそう小さく見せているが、頭も小さく、シャツからのぞく腕も細いので、バランスがとれていた。

彼女はどこか違っていた。私達が騒いだりふざけたりしているのを、遠くから眺めているようなところがあった。退屈そうな仕草やまなざしが同じ世代の女達とは違うふうに見えるのかもしれない。

ねえ、と隣の聡子さとこが私の肘ひじを鉛筆でつついた。

「お昼、どうする」

「どうしよう」

私は聡子の口調を真似て答えた。

「午後からの講義、出るの」

聡子は少し私の方に体を寄せてくる。

「出るの？」

私と聡子は顔を見合わせる。目を大きくさせて、くくくと甘えた声で聡子が笑う。かなえが小さく、くしゃみをした。聡子があ、と口に手をあてた。

「宗方かなえだ」

ねえ、といっそう私に擦りよるようにして聡子は声をひそめる。

「めったに学校にも来ないのに、やっぱりこの講義だけは出てるのよね、彼女」

聡子はシートにしたばかりの自分の髪をなでながら、やっぱりね、と繰り返した。私は横目で聡子を見る。高校生のようなふっくらとした頬。似合わない派手目のイヤリング。早々と脂あぶらのうきだした鼻のあたりが、少し暑苦しい感じだ。よしなさいよ。喉のどまで出かかった言葉を飲み込んで、私はひとさし指を口の前でたて、しゅんと囁く。聡子は私を見て舌を出した。

「やっぱり、噂は本当なのかしらね」

聡子の目が落ち着かなく動く。

「でも、彼女に関しては噂が多過ぎて、どれが本当なのか、わからないわよね」

私のひとさし指を手で覆おほいながら、場違いな真顔で聡子は続けた。

ベルが鳴る。慌あわてたように佐山講師は本を閉じた。では、次回、と言いながら上着を着る。痩せすぎた体に背広は似合わない。白髪まじりの長髪、そして口髭。まだ四十代のは

じめのはずなのに、肌にも艶がなく、このまま倒れてしまうのではないかと思ってしまう。学生たちはいっせいに教室から出ていく。

私達はどちらからともなく、部室へ向かった。ドアを開けると煙草の煙で空気が白く濁っていた。

「ああら」

亜由美が煙草を口の端にくわえながら、てのひらをひらひらさせた。

表向きは文芸部となっているが、先輩たちが卒業した後は活動もせず、名前だけの部になっていた。今はただの喫煙室だ。今年入学した一年生も入らず三人のたまり場だった。

新入生の勧誘をよそうと言いつ出したのは亜由美だった。いいじゃない、面倒だよ。私も聡子もなんとなく、それに従った。

「なによお、また煙草タイムなの」

聡子は濁った空気を追い払うように腕を振り回した。私は半分まで空いていた窓をぜんぶ開けて壁にもたれた。亜由美が煙草を一本取り出して私に放る。ライターもちょうだい、と言って私もくわえる。

「この学校は一応、禁煙なのよ。短大なんだから」

聡子が両肘をテーブルについて、亜由美に口をとがらせる。

「煙草臭くなっちゃうんだから。昨日、うちの母親に言われたのよ、煙草臭いって」

「私はもう二十歳になったよ、五月二十日でね、おめでたく」

亜由美は煙を聡子に吹きかける。

「年のこと言ってるわけじゃないわ」

「煙草以外なら何でもやるくせに」

私は壁にもたれたまま、また外を見ていた。帰りじたくの四、五人が向こう側を通りすぎる。どこか均一的な化粧。一年生だろう。

「そういえば、宗方かなえが出ていたわよ、佐山先生の講義に」

やっぱりね、と亜由美が頬杖をつく。

「でもさあ、佐山さんと、篠原さんじゃ、格が違うでしょ。一方は教授様だものね。佐山さんの立場ってまづくなかったのかね」

「彼女っておじさんにモテるのかしら」

聡子は小さくため息をついた。

「今も続いてるのかな。でも、おじさんってそれなりにいいかもね」

亜由美が眉を持ち上げて言った。

「いいんじゃない、佐山先生はこの学校の先生じゃないし、それに……」

それに、と言った後、聡子は口ごもった。

「それに、篠原さん、死んじゃったしね」

聡子の言葉の続きを引き受けて亜由美はくすりと笑う。

「もしかしたら、彼女、黒い服だった？」

あ、と聡子が目を輝かせた。

「そう。黒いシャツ着て、黒いスカートに黒いソックスはいてた。全身黒づくめだった」

ひゃあ、と亜由美が後ろに倒れる真似をした。ちりちりになった髪が立っている私の手に触れた。

「すごく痛んでるわよ、亜由美の髪」

私は亜由美の髪を引っ張って言った。

「ごわごわでしょ」

亜由美は大きな口を開けて笑った。

「でも、全然ちがうって噂もあるじゃない、ほら……、亜由美、知ってる」

「知ってるよ」

「でも、彼女って何か素敵よね」

私は窓に腰かけて言った。亜由美が振り返った。

「なんか大人っぽいじゃない。いつも一人で。セクシーな感じで」

「素敵って、愛子はあるうのが好みなの」

かなえがこんな話を聞いたら、どう反応するのだろうか。退屈そうに聞いているだけだろうか。私はふと、そう思った。そうであって欲しかった。

「今日、飲みに行こうよ、三人で」

賛成と聡子が間をあげずに手をたたく。

「私、だめ、デート」

「幹也と」

「幹也しかないもの」

「うまくやってんじゃない」

亜由美はにやりと笑って私を見た。

「感謝してもらいましょう。私がタケオと付き合ってなかったら、愛子は幹也に会えなかったのかもしれないんだから。何ヵ月になったっけ、半年ぐらい」

私は黙って首をすくめた。

午後からの講義は出ないことに決めた。ロビーの掲示板を見て、連絡事項を確認する。

ああら。十年ぶりに会ったような声を出し、亜由美が由紀江と話を始めた。亜由美と張り合うほどの派手な服装だ。ガラガラ声のうえ大声で話すので、遠くにいてもすぐにわかる。外見から見れば、亜由美が私や聡子と一緒にいることのほうが不思議だった。いつまでも野暮^{やぼ}ったい私、子供みたいな顔をした聡子。こんなに女達がいるところなのに、亜由美は私達と仲良くなり、私は亜由美と聡子以外にほとんど口をきいたことがない。

黒い服が目の端に映った。追いかけるように振りむくと、かなえが階段を昇っていくと